

人間の世紀・共生の時代に向かって

学長 佐々木 雄太

私たちは世紀の境を越えて歩き始めています。20 世紀は、科学技術の驚異的な発達を背景にした巨大な産業の時代でした。生産力は急速に拡大し、先進諸国を中心に人々の生活水準は著しい向上を遂げました。やがて「近代化」の波はヨーロッパの外の世界にも急速に広がりました。これに伴って、「民主主義」や「人権」、「福祉」などの概念が世界中に広まったという意味で、20 世紀は「進歩の世紀」でもありました。

しかし、産業の急速な成達は、グローバルなレベルでの、また一国内レベルでの、貧富の格差を増大させました。また、自然環境の破壊など人類社会の危機を深めた事実も否定できません。さらに、20 世紀はふたつの世界大戦をはじめ幾多の戦争や国家権力の暴虐によって、じつに一億人が「非業の死」を遂げた世紀でもありました。この 20 世紀を、ある歴史家は「憎悪の世紀 Age of Hatred」と呼び、またある歴史家は「極端な時代 Age of Extreme」と表現しました。

私たちは、このような 20 世紀の光と影を後に、新しい世紀の入り口を歩み始めているのです。新しいミレニアムの幕開きに当たって、多くの人々が平和を期待しました。しかし、未だに平和な世界への兆候は見えません。まだ記憶に新しい 2001 年 9 月 11 日の事件以来、国際社会における暴力の連鎖が止まることを知らず、数多くの無辜の民が戦火に追われ、貧困にあえいでいます。多様な価値観、文化、宗教などの「共生」こそが必要とされるこの時代に、自らを「限りなき正義」と称し、他者を「悪」と決め付ける正邪二元論的が跋扈し、「文明の衝突」がことさらに作り出されているように思えます。

グローバル化を続ける経済も、私たちには見えない様々な要因によってゆすぶられ、不透明性を増大させています。その下で、競争力の弱い国々や産業が痛めつけられているのが特徴です。1960 年代や 70 年代に力を持っていた「豊かな国々による貧しい国々への援助」という思想はもはや顧みられなくなり、呵責のない競争の下で、かつて「南北問題」と呼ばれた先進国と発展途上国との経済格差の増幅が進んでいます。

日本の経済は、ひと頃にくらべて回復局面にあると言われます。しかし、「ワーキング・プア」、「格差社会」がこの頃の日本社会を語るキーワードになり、多くの人々が、非常勤やパートなど不安定な雇用を余儀なくされています。

そのような社会的閉塞感の中で、路上のひったくりに始まり、いわれのない殺人事件に至るまで、非人間的な事件が連日報じられています。また、様々な形の「騙し」や「偽」の横行も目に余ります。一人住まいの老人の弱みに付け込んだ「振り込め詐欺」に始ま

って、建築業界や証券取引業界を舞台にした大規模で専門的知識を悪用した社会的詐欺、あるいは食品業界や製紙業界における「偽装」も次々に暴露されました。大変遺憾なことに、日本や韓国のトップレベルの大学や研究機関における研究データの捏造など、「騙し」は学術の世界にも及びました。

なぜこのように荒んだ社会現象が、次から次へと立ち現れるのでしょうか。

20世紀の最後の20年間に、経済を中心に「新自由主義」という旗の下で激しい競争社会が展開しました。第二次世界大戦後の世界では、ある時期まで、「国家あるいは社会が社会的弱者を救済する」という思想が広く共有されていました。ところが、このような思想が放棄され、「市場の原理」・「自由競争の原理」がこれに全面的に取って代わりました。その下で、経済・社会の様々な場面で競争が激化し、その結果、少数のいわゆる「勝ち組」と多数の「負け組」が作り出され、その間の格差が増幅しつつあるのです。

証券取引法の隙間をつき、あるいは建築技術の専門性を利用した「騙し」、あるいは食品業界に広がった「偽装」の背景には、この市場万能主義の競争社会化があると思います。学術研究の世界における「騙し」も、研究者間の「競争」の激化の産物です。

ある人々は、競争は人間性の開花の条件であると言いますが、果たしてそうでしょうか。この四半世紀の事実を見ると、行過ぎた競争が人間社会の「共同性」の側面を失わせ、社会的弱者への思いやりを忘れさせたように思われます。昨今の競争社会化は、「勝ち組」の側にも「負け組」の側にも、人間性の喪失という痛ましい症状を残しつつあるように思われるのです。凶悪で非人間的な犯罪の増加の背景には、度を過ぎた競争社会が作り出した「人間社会のすさみ」を指摘しなければなりません。

*

このように、今日の社会は、人間に優しく、すべての人々にとって幸せな社会とは言えないように思います。しかし、このような社会の姿はどうしようもない現象ではありません。なぜなら、経済をはじめ社会の歪は、人の意思と無関係ではないからです。弱者救済の思想を捨てた市場万能主義によって「格差社会」を作り出したのは、人間の、あるいは人間社会の意思にほかなりません。紛争が止まない国際社会について言うならば、宗教や文化の違いが必然的に対立や衝突を生むわけではありません。紛争や対立には、必ず「文化の違い」を利用して権力を手にしようという人間の意志が働いています。要するに、人間の意思によって生み出された社会現象であれば、人間の意思によってこれを変革することが可能なのです。

内部に様々な問題を抱える人間社会は、さらに大きな難題に直面しています。北極や南極の氷が解けて崩れ落ち、太平洋の小さな島々が沈没の危機に瀕しています。ヒマラヤの氷河が溶けて、麓の村が水没の危機に瀕しています。地球温暖化は抜き差しならぬ局面に至っています。一般に、人間社会は自然現象に逆らうことはできません。しかし、地球温暖化は人間社会が作り出した自然現象であり、したがって、人間社会の意思によ

って変えることができると思います。科学技術の発達にこの問題の解決を期待する人々が増えています。しかし、誰かが解決してくれるのを待つのではなく、私たち一人々々が解決に知恵と力を発揮すべき課題であると思います。

2005年に本学の隣接地で国際博覧会「愛・地球博」が開かれました。この博覧会は「自然の叡智」に学び、多様な生物の共生、自然と人間社会の共生、地球上の多様な文化の共生を実現することが、人類の当面する課題であるという、貴重なメッセージを発信しました。この「共生」の思想は、博覧会を訪れた多くの人々によって共有され、広がっていると思います。やがて、この思想の共有が社会を作り変える力に転じることを期待したいと思います。

また、先程は、「行過ぎた競争社会化が、人間社会の共同性を失わせた」と述べましたが、今日の社会から共同性や人間性がすっかりなくなってしまったわけではありません。先頃、イージス艦と漁船の衝突事故が生じましたが、行方不明になった仲間を思って、寒風吹きすさぶ浜辺に立って祈り続ける漁協の人々の姿や、近年、しばしば発生した大きな災害の度に見られた人々の助け合いの姿には、人間の共同性や思いやりの思想をしっかりと認めることができます。

20世紀が巨大な物質文明の時代であったとすれば、21世紀は「人間の時代」でなければならないと考えます。人間の意志によって、人間本位の社会を打ち立てることが21世紀の課題だと考えます。「近代化」の波が押し寄せつつあった1920年代に、ひとりのトルコの詩人が、獄中から愛する息子に次のように言い送りました。

雲を愛し 機械を 書物を愛せよ
だがまず何よりも 人間を愛せよ。
地上のあらゆる財宝が お前のよろこびとなり
影と光とが お前のよろこびとなり
四季の移り変わりが お前のよろこびとなるように
だがまず何よりも人間が お前のよろこびとなるように。

「人間の世紀」は、人間の共同性を回復し、多世代間の共生、性差を越えた共生、健常者と障害者の共生など、社会における様々な人々の共生を実現しなければなりません。また、地域社会からグローバルな空間にいたるまで、様々な文化や価値観の相互承認と共生を実現することが課題です。さらに、最近の生命科学や情報科学の驚異的な事例に象徴されるように、科学技術の発達はこれを押し止めようがないとすれば、新しい時代には、常に「人間と科学技術の共生」を問うことが求められると思います。

必要なのは、「何よりも人間を大切にすること」という思想に立った人々の行動であると思います。それが、やがて世界平和と成熟した共生社会の実現につながることを期待したいと思います。

(注記 本稿は、多文化共生研究所の依頼により、愛知県立大学 2007 年度卒業式における告示に加筆修正したものである。)

著者プロフィール

佐々木雄太 (SASAKI Yuta) 愛知県立大学長

1943 年 4 月 20 日生れ

京都大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程中退。法学博士。

大分大学助手、講師、助教授を経て、1985 年 4 月名古屋大学教授。

名古屋大学法学部長、同法政国際教育協力研究センター長、同副総長を経て、2004 年 4 月愛知県立大学学長、名古屋大学名誉教授。

専攻は、国際政治学・国際政治史。主要著書に『三〇年代イギリス外交戦略』(名古屋大学出版会、1987 年)、『イギリス帝国とスエズ戦争』(名古屋大学出版会、1997 年)、『世界戦争の時代とイギリス帝国』(編著書、ミネルヴァ書房、2006 年)。



2005 年「国際学生シンポジウム」にて